

仏造る 真朱足らずは

水たまる 池田の朝臣が 鼻の上を掘れ

大神奥守(巻十六・三八四一)

この歌は、奈良時代の官人であった大神朝臣奥守が、同じく官人の池田朝臣に対して詠んだ歌で、三八四〇番歌「寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りてその子播まむ」の返歌です。

両方の歌の題詞に「唾う」(あざ笑う)という文言が入っており、大神奥守の体が餓

鬼のように痩せこけているのを池田がからかったのに対し、奥守が「お前の鼻だって真っ赤じゃないか」と笑って応酬しています。二人の男性が互いの身体を笑い合うという他愛のない内容です。

「真朱」とは「丹」とも呼ばれた水銀朱(硫化水銀)のこと、

やまと
万葉がたり

赤色の天然顔料として古くから利用されました。真朱が必要なら赤鼻の上を掘ればよいとは、赤色を帯びた地の掘削により水銀朱を採取することを踏まえた表現です。ここから、水銀朱は採掘方法も含めてよく知られた鉱物であったことがわかります。

は、水銀朱が仏を造るための素材だと書かれている点です。鍍金(メッキ)を施した銅製の仏像は金銅仏と呼ばれ、金と水銀の合金(アマルガム)を銅の表面に塗り、加熱して水銀成分を蒸発させて金の被膜を形成するとい

う手法で造られます。この金アマルガム法に用いられる水銀は水銀朱を精製して作られました。

大神奥守らが官人として活動していた頃、東大寺では巨大な金銅仏である盧舎那仏像が造られ、大仏の仏身に

は陸奥国で見つかった金が金アマルガム法により塗られました。大仏の鍍金作業に使われた水銀は2・5ト(一説には0・8ト)にも及びます。大仏造立という国家的大事業によって、仏を造るために水銀が必要であることが「常識」となり、歌の文言にも反映されたのかもしれない。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

次回回は16日

【訳】仏像を造るのに必要な真朱が足りなかったら、水のたまる池の池田朝臣の鼻の上を掘るがよいよ。

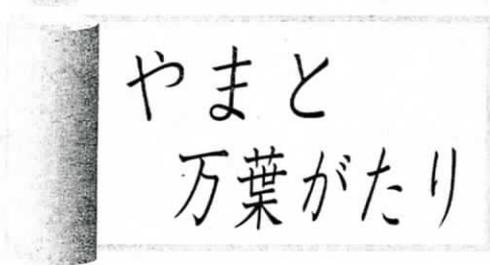
さらに興味深いの

高田の野の上の宮は 荒れにけり

立たしし君の 御代遠そけば

この歌は、758(天平宝字2)年2月に、中臣朝臣清麻呂の邸宅で開かれた宴席にて詠まれた計18首の短歌(万葉集四四九六、四五三番歌)のうち一首です。題詞によると、宴の出席者たちが興趣のおもむくままに高田離宮へ思いを寄せて詠んだとあり、この歌から始まる5首

はいずれも高田離宮を偲ぶ内容の短歌です。高田離宮とは、平城京の東郊、現在の奈良市白毫寺町付近にあった聖武天皇の離宮で、春日離宮とも呼ばれました。御蓋山の南方、高田山西麓の小高い場所にあたり、西に広がる大和盆地を一望できる風光明媚な土地です。この離宮は平城



遷都以前から存在し、元明天皇ら代々の天皇が滞在しました。特に聖武天皇は好んでいらしく、家持など臣下の人々にとつて、高田離宮に立って眼下の景色を見下ろす聖武天皇の姿はとりわけ印象深かったことが歌からも読み取れます。

聖武太上天皇は756年(天平勝宝八歳)

大伴家持(巻二十・四五〇六)

に亡くなり、遺産の多くは光明皇太后と孝謙天皇によって東大寺へ寄付されました。この時、東大寺へ納められたのは正倉院宝物として現在まで伝わる遺愛の品々だけでなく、離宮とそれに付属する土地なども含まれま

た。高田離宮もその一つで、東大寺へ寄付されて春日荘という荘園になりました。この歌が詠まれた当時、高田離宮はすでに一部の施設を除いて東大寺領荘園となり、離宮であった頃のにぎわいなどは過去の景色となっていました。荒れにけりという表現からは、離宮にあった豪華な宮殿建築や調度なども失われていたことがうかがえます。聖武太上天皇の崩御によって離宮としての役目を終えた高田離宮の光景は、在りし日の聖武天皇の姿とともに臣下たちの記憶の中にとどめられ、聖武天皇を偲ぶよすがとなったのでしよう。(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

次回30日

【訳】高田の野のほとりの離宮は荒れてしまったことだ。宮にお立ちになった我が君の御代も遠ざかったのだ。

六月の

地さへ割けて

照る日にも

わが袖乾めや 君に逢はずして

(作者未詳 卷十・一九九五)

暑い日が続いていま例あります。「秋風が寒い」というだけで何で1、2を争う暑い歌をご紹介します。

実は、万葉集で「暑い」という言葉は一例しかありません。暑くて汗をかきながら筑波山に登ったが、素晴らしい眺望に恵まれ楽しんでという例(巻九・一七五三)だけです。一方、「寒い」は約60

例あります。「秋風が寒い」というだけで何だか切ない歌になるのに対し、「暑い」は歌になりづらいようです。

今回の歌は「暑い」という言葉こそないものの、存分に暑さを感じさせてくれる夏の相聞(恋)の歌です。「君」という語があるため、女性から男性への歌だ

やまと
万葉がたり

と分かります。

「六月」は「みなつき(みなづき)」と読みます。「みなと(水の門)」などと同様に「な」は助詞で、「水の月」が語源と考えられます。水を張った田に由来するという説もあります。

旧暦では4月から6月が夏なので、6月は晩夏(夏の終わり)と

なりませぬ。旧暦と新暦(太陽暦)では1と2カ月程のずれがあり、旧暦6月は今の7と8月ごろにあたります。

夏の終わりに照りつける太陽は、地面が乾いて割れるほどだが、それでも私の袖は乾く

だるうか、いや乾かない。「乾めや」の「や」は反語で、結局否定になります。さて、なぜこの作者の女性の袖は濡れているのでしょうか。

夏の終わりに照りつける太陽は、地面が乾いて割れるほどだが、汗、かと思いきや、涙です。恋しい男性に逢えないので、袖は涙に

濡れたままなのです。「照る日」も万葉集では珍しい表現で、照るのは圧倒的に月、ついで花です。地割れるほど照る太陽という、ほとんど類例のない表現で詠み始め、それでも乾かない自分の涙の多さ、恋心の大きさを見事に表しています。

夏本番、早くも秋風が待ち遠しいですね。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

次回回は7月14日

【訳】 晩夏、六月の大地まで裂けるように照る太陽にも、私の袖はどうして乾こう。あなたにお会いせずして。